

54 宋代の脈状分類

—七表八裏九道脈の変遷

中川 俊之

日本鍼灸研究会

緒言

脈状の分類は、大きく相類分類と陰陽分類に分けられる。相類分類は『脈経』（三世紀後半成立）、『平脈略例』（敦煌文書、唐初までに成立）、『亡名氏脈経第二種』（敦煌文書、唐初までに成立）であり、陰陽分類は『玄感脈経』（敦煌文書、唐初までに成立）、『千金方』（六五〇年頃成立）、『千金翼方』（七世紀後半成立）である。『脈訣』（六朝期成立、一説に五代期）に見られる七表八裏九道脈の分類はこの陰陽分類から派生したものと考えられる。

北宋から南宋の脈状記載は全てこの分類を採用している。『脈粹』（一〇六六年、施世基撰）、『傷寒類證活人書』（一一〇八年、朱肱撰）、『三因極一病證方論』

（一一七四年、陳言撰）、『察病指南』（一二四一年、施發撰）などが七表八裏九道を記載する医書として挙げられる。但し、お互いに相違点があり、各医書の思考、工夫の跡が見える。

本稿ではこれら相違点を明らかにし、北宋、南宋代の脈状分類法の変遷過程を探る。

七表八裏九道脈の変遷

○『脈訣』の脈状配列

『脈訣』卷第三・七平八裏脈総論に脈状記載が見え、二四脈状が七表八裏九道の分類で記載される。

〔浮、芤、滑、実、弦、緊、洪〕

（以上陽脈、七表）

〔微、沈、緩、瀄、遲、伏、濡、弱〕

（以上陰脈、八裏）

〔長、短、虚、促、結、代、牢、動、細〕

前半七脈状は陽脈であり七表脈と称され、次の八脈状は陰脈であり八裏脈と称される。後半の九脈

状は九道脈として、脈状毎に陰脈か陽脈かの説明が有る。

○『脈粹』の脈状配列

〔浮、芤、滑、実、弦、緊、洪〕

〔遲、緩、微、瀇、濡、弱、沈、伏〕

〔長、短、《屋漏、蝦遊、彈石、雀啄、魚翔、解索、釜沸》、虚、牢、促、結、代、革、細、動〕

下線は『脈訣』と配列の異なる脈状である。八裏脈、九道脈の順序を大幅に変更し、遲緩、沈伏などの相類配列としている。九道脈の《 》内は死脈である。九道脈中に死脈を配するのは『脈粹』のみである。

○『活人書』の脈状配列

〔浮、芤、滑、実、弦、緊、洪〕

〔微、沈、緩、瀇、遲、伏、濡、弱〕

〔結、促、代〕

七表脈、八裏脈は『脈訣』の配列の通りである。

九道脈は大幅に省略され、結脈、促脈、代脈といった予後不良の脈状が記載されるのみである。

○『三因方』の脈状配列

〔浮、芤、滑、実、弦、緊、洪〕〔微、沈、緩、瀇、遲、伏、濡、弱〕〔細、數、動、虚、促、結、散、革、代〕

『脈訣』七表八裏九道の体例を採るが、『脈訣』九道脈に見える長脈、短脈が無く、替りに數脈、散脈を記載する。

○『察病指南』の脈状配列

〔浮、芤、滑、實、弦、緊、洪〕

〔微、沈、緩、瀇、遲、伏、濡、弱〕

〔長、促、短、虚、結、牢、動、細、代、數、大〕

七表脈、八裏脈は、『脈訣』と同配列である。九道脈は數脈、大脈を加え十一脈状を列記する。